

詩編第 51 (50) 編からイザヤ書へ —ビザンティン典礼に拠りつつ—

秋 山 学

序.

旧約聖書の詩編第 51 (50) 編（ナンバリングに関しては、ヘブライ語原典とギリシア語七〇人訳とでほぼ一つずつずれる；前者がヘブライ語原典、後者がギリシア語訳における番号）は、ローマ典礼教会においては通常「痛悔のための詩編」として広く普及しているが、ビザンティン典礼教会にあってその普及度はさらに高い。たとえば同典礼における朝課は、キリストの復活を寿ぐ復活徹夜祭にその頂点を見出すものであるが、この朝課では福音朗読の後、聖堂中央に設置されたイコンへの接吻を会衆が行う間、それに合わせてこの詩編第 51 (50) 編が唱えられる（秋山 2010a；なおビザンティン典礼では、旧約聖書の朗読に際してその原典となるのはギリシア語訳テキストであるため、この場合は「詩編第 50 編」が読み上げられることになる）。このほか、典礼のあらゆる次第に先立って行われる「常なる始め」という祈禱文にあっては、「汝ら来たれ、拝まん、われらの王にして神なる方を。来たれ、拝まん、われらの王にして神なる方・キリストを。来たれ、伏して拝まん、われらの王にして主、神なる方イエス・キリストを」という句に続き、特に夜半課などではその後に詩編第 50 編が読誦される（秋山 2010b）。

このように、特にビザンティン典礼において、その痛悔性に限定されず、祈禱文として広く普及している詩編第 51 (50) 編であるが、そのテキスト中に用いられている字句を細かく見ると、聖書の他の部分、特に旧・新約聖書のエッセンスとも言うべき部分が、確かにこの詩編第 51 (50) 編のうちに盛り込まれていることが分かる。

コロナ禍が吹き荒れた 2020 年の夏、筆者は毎年口頭発表をおこなっているハンガリー・セグド国際聖書学会において、拙稿「エウカリスティアの観点からの詩編第 51 (50) 編の解釈—特にヨハネ文献とビザンティン典礼諸文献に基づきつつ—」（原文ハンガリー語；31. Szegedi Nemzetközi Biblikus Konferencia/

2020-08.24-26, youtube version ; 印刷ヴァージョンは 2021 年夏刊行予定) を口頭発表した。この発表において筆者は、通常「ダビデによる痛悔の詩編」と捉えられることの多い詩編第 51 (50) 編が、ビザンティン典礼の祈祷日課にあって、夜半課のほか、上述のように主日朝課・福音朗読の後に唱えられることに着目した。この口頭発表において筆者が明らかにしたのは、詩編第 51 (50) 編においては痛悔が語られるだけでなく、骨(10)、心(12)、血(16)、舌(16)、唇(17)といった身体の各部位が順に聖なる霊(13)によって浄められ、他者に向けて神の栄光を告げ知らせるに至るまで、その回心と奉獻の軌跡(15, 16, 17) が辿られているという点である。ちなみにハンガリーに向けてのメッセージとして、このような痛悔から奉獻へという内容を含む詩編の暗唱読誦は、コロナ禍による「ミサなし状況」に代わり得る自己奉獻のシステムとして有効なのではないか、との見解を提示した。

本稿では、この発表の結論部から一步前進させて、この詩編第 51 (50) 編の読解を、2019 年前後より筆者が進めているイザヤ書研究と連携させ、後者から前者への史的経緯を前提とした上で、逆に前者から後者に向けての神学的探求の可能性を捉えるべく努めたいと思う。その使信とは「血の贖い」「讃美」「小さくされた神の民」「歡喜」である。

I

詩編第51 (50) 編

まず初めに、この詩編第 51 (50) 編について、その全文を、拙訳とともに掲げることにはしたい。ヘブライ語原典・ギリシア語訳文とともに、ハンガリー語訳、および拙訳による日本語訳も付しておく（冒頭第 1, 第 2 節は省略；後述）。

詩編第 51 (50) 編

3) ḥonnēnî 'ēlōhīm k'ḥasdekā / k'rōb rah^ameykā m'ḥē(h) p'sā'āy.

Ἐλέησόν με, ὁ θεός, κατὰ τὸ μέγα ἔλεός σου / καὶ κατὰ τὸ πλῆθος τῶν οἰκτιρμῶν σου ἐξάλειπον τὸ ἀνόμημά μου.

Könyörülj rajtam Isten a te nagy irgalmasságod szerint / és könyörületed sokasága szerint töröld el gonoszságomat!

神よ、わたくしを憐れみ、あなたの大きな憐れみによって、またあなたの豊

かな慈しみによって、わたくしの不義を拭い去り給え。

4) hereḅ kaḅḅ^sēnī mē^awōnī / ūmēḥattā^tī tah^rrēnī. (※Qere の hereḅ を採った)

ἐπὶ πλεῖον πλὺνόν με ἀπὸ τῆς ἀνομίας μου / καὶ ἀπὸ τῆς ἀμαρτίας μου καθάρισόν με.

Moss meg engem mindinkább gonoszságomból / és bűnömből tisztíts meg engem!

わたくしを、わが不義からさらに洗い、わたくしの罪からわたくしを清めたまえ。

5) kī-p^sšā^aay ^anī ^rēdā^a / w^eḥattā^tī negdī tāmīd.

ὅτι τὴν ἀνομίαν μου ἐγὼ γινώσκω, / καὶ ἡ ἀμαρτία μου ἐνώπιόν μου ἐστὶν διὰ παντός.

Mert elismerem gonoszságomat / és bűnöm előttem vagyom minden koron.

わたくしは自らの罪を知っており、わたくしの罪は始終わたくしの眼前にある。

6 a) l^ekā l^ebadd^ekā ḥatā^tī / w^eḥāra^a b^e^cēneykā ^aśīṭī.

σοὶ μόνῳ ἤμαρτον / καὶ τὸ πονηρὸν ἐνώπιόν σου ἐποίησα,

Egyedül neked vétettem / és gonoszt előtted cselekedtem.

わたくしが罪を犯したのはただあなただけに対してであり、わたくしはあなたの前に悪を為した。

6 b) l^ema^aan tišdaq b^edōḅrekā / tizke(h) b^ešoṭekā.

ὅπως ἂν δικαιωθῇς ἐν τοῖς λόγοις σου / καὶ νικήσῃς ἐν τῷ κρίνεσθαί σε.

Hogy igaznak találtassál beszédeidben / és győzedelmes légy, midőn ítéltetel.

あなたはその言葉において正しき方とされ、あなたが裁かれるとき、常に勝利を収める。

7) hēn-b^eāwōn ḥōlālī / ūḅ^eḥēt(°) yeh^ematnī ^rimmī.

ἰδοὺ γὰρ ἐν ἀνομίαις συνελήμφθην, / καὶ ἐν ἀμαρτίαις ἐκίσσησέν με ἡ μήτηρ μου.

Mert íme, vétékben fogantattam / és bűnökben fogant engem anyám.

というのも見よ、わたくしは不法のうちに身ごもられ、罪のうちにわが母はわたくしを懐胎した。

8) hēn-^rmet **ḥāpaštā** ḥattuhōt / ūḅ^esātum ḥokmā tōdī^rēnī.

ἰδοὺ γὰρ ἀλήθειαν ἠγάπησας, / τὰ ἄδηλα καὶ τὰ κρύφια τῆς σοφίας σου ἐδήλωσάς μοι.

Mert íme, az igazságot szereted / a te bölcsességed titkos és elrejtett dolgait kinyilatkoztattad nekem.

見よ、あなたは真理を愛し、あなたはわたくしに明らかならざること、あなたの知恵の隠された部分を明らかにする。

9) tʰaṭṭeʿēnī bʿēzōḅ wʿeṭhār / tʰkabbʿsēnī ūmīššeleg ʾalbīn.

ῥαντιεῖς με ὑσώπω, καὶ καθαριθήσομαι / πλυνεῖς με, καὶ ὑπὲρ χιόνα λευκανθήσομαι.

Hints meg engem izsóppal és megtisztulok, / moss meg engem és a hónál fehérebb leszek!

ヒソブもてわたくしを淨めたまえ、そうすればわたくしは淨められよう。わたくしを洗いたまえ、そうすればわたくしは雪よりも白くなるであろう。

10) tašmīʿēnī šāsōn wʿšimhā / tāgēlʿnā ʿašāmōṭ dikkīṭā.

ἀκουτιεῖς με ἀγαλλίασιν καὶ εὐφροσύνην. / ἀγαλλιάσονται ὅστᾳ τεταπεινωμένα.

Add, hogy örömtől és vigasságot halljak, / és örvendezzenek megalázott csontjaim!

わたくしに喜びと歡喜を聞かせたまえ。そうすれば低くされた骨は歡喜に踊るであろう。

11) hastēr pāneykā mēhʿtāʾāy / wʿkol-ʿa wōnōṭay mʿhē.

ἀπόστρεψον τὸ πρόσωπόν σου ἀπὸ τῶν ἁμαρτιῶν μου / καὶ πάσας τὰς ἀνομίας μου ἐξάλειψον.

Fordítsd el orcádat bűneimről, / és töröld el minden gonoszságomat!

あなたの御顔をわが罪から逸らせたまえ。そしてわがあらゆる不義を拭い去り給え。

12) lēḅ ṭāhōr bʿrāʾ-lī ʾlōhīm / wʿrūaḥ nākōn ḥaddēš bʿqirbī.

καρδίαν καθαράν κτίσον ἐν ἐμοί, ὁ θεός, / καὶ πνεῦμα εὐθὲς ἐγκαίνισον ἐν τοῖς ἐγκάτοις μου.

Tiszta szívet teremts bennem ó Isten, / és az igaz lelket újítsd meg benső részeimben!

おお神よ、淨い心をわたくしのうちに創り給え。そしてわたくしのうちに、真なる息吹を新たにさせ給え。

13) ʾal-tašlīkēnī millʿpāneykā / wʿrūaḥ qodšʿkā ʾal-tiqqaḥ mimmennī.

μὴ ἀπορρίψης με ἀπὸ τοῦ προσώπου σου / καὶ τὸ πνεῦμα τὸ ἅγιόν σου μὴ ἀντανέλης ἀπʼ ἐμοῦ.

Ne vess el engem színed elől, / és Szentlelkedet ne vedd el tőlem!

あなたの御顔からわたくしを遠ざけ給うな。そしてあなたの聖なる霊をわたくしから取り去り給うな。

14) hāšīḅā lī šsōn yišʿekā / wʿrūaḥ nʿdīḅā ṭismʿkēnī.

ἀπόδος μοι τὴν ἀγαλλίασιν τοῦ σωτηρίου σου / καὶ πνεύματι ἡγεμονικῷ στήρισόν
με.

Add vissza nekem üdvözítésed örömet, / és uralkodó lélekkel erősíts meg engem!

救いの喜びをわたくしに返し、治めの霊もてわたくしを力づけ給え。

15) ʾālamṁdā pōšʿīm dʿrākeykā / wʿhaṭṭāʾīm ʿēleykā yāšūbū.

διδάξω ἀνόμους τὰς ὁδοὺς σου, / καὶ ἀσεβεῖς ἐπὶ σὲ ἐπιστρέψουσιν.

Megtanítom útaira a gonoszokat / és az istentelenek hozzád térnek.

わたくしは法を知らぬ者たちをあなたの道に向けて諭そう。そうすれば、不
敬なる者たちはあなたに立ち戻るであろう。

16) haššilēnī middāmīm ʿlōhīm ʿlōhē tʿšūʾātī / tʿrannēn lʿšōnī šidqātekā.

ῥῥσαι με ἐξ αἱμάτων, ὁ θεὸς ὁ θεὸς τῆς σωτηρίας μου / ἀγαλλιάσεται ἡ γλῶσσά μου
τὴν δικαιοσύνην σου.

Szabadíts meg engem a vérbűntől, Isten, üdvösségem Istene, / és nyelvem
magasztalni fogja a te igazságodat.

わたくしを血から解き放ち給え、神よ、わが救いの神よ。わが舌は、あなた
の正義に喜ぶであろう。

17) ʾqdōnāy sʿpāṭay tiptāh / ūpī yaggīd tʿhillātekā.

κύριε, τὰ χεῖλή μου ἀνοίξεις, / καὶ τὸ στόμα μου ἀναγγελεῖ τὴν αἰνέσιν σου.

Uram, nyisd meg ajkaimat / és szám a te dicséretedet fogja hirdetni!

主よ、わが唇を開き給え、そうすればわが口は、あなたへの讃美を告げ知ら
せるであろう。

18) kī lōʾ-tāhpōš zehāh / wʿettēnā ʾolā lōʾ tīrse(h).

ὅτι εἰ ἠθέλησας θυσίαν, ἔδωκα ἄν / ὀλοκαυτώματα οὐκ εὐδοκῆσεις.

Mert ha kedvelnéd, bizonyára áldozatot adtam volna, / de az égő áldozatokban nem
gyönyörködöl.

もしあなたがいけにえを欲するのであれば、わたくしは捧げましょう。だ
が、あなたが焼き尽くすいけにえを喜ぶことはない。

19) zibhē ʿlōhīm rūah nišbārā / lēb-nišbār wʿniḏke(h) ʿlōhīm lōʾ tībze(h).

θυσία τῷ θεῷ πνεῦμα συντετριμμένον, / καρδίαν συντετριμμένην καὶ
τεταπεινωμένην ὁ θεὸς οὐκ ἐξουθενώσει.

Áldozat Istennek a kesergő lélek. / A töredelmes és alázatos szívet, ó Isten, nem
veted meg!

神に適う献げものは打ち砕かれた霊、打ち砕かれ低くされた心を神が無とす

ることではない。

20) hêtîbâ ħiršôn^akā 'et-šiyyôn / tiḥne(h) ḥômôt y^arûšālāim

ἀγασνον, κύριε, ἐν τῇ εὐδοκίᾳ σου τὴν Σιών, / καὶ οἰκοδομηθήτω τὰ τείχη
Ιερουσαλημ·

Cselekedjél Uram kegyesen jóakarattoból Sionnal, / hogy épüljenek Jeruzsálem
kőfarai!

主よ、あなたの御意のうちにシオンを嘉したまえ。そしてエルサレムの城
壁を完成させ給え。

21) 'āz taḥpōš zibḥê-šedeq 'ôlâ w^akālîl / 'āz ya^alû 'al-mizbah^akā pārîm.

τότε εὐδοκήσεις θυσίαν δικαιοσύνης, ἀναφορὰν καὶ ὀλοκαυτώματα· / τότε
ἀνοίσουσιν ἐπὶ τὸ θυσιαστήριόν σου μόσχους.

Akkor veszed kedvesen az igazság áldozatát, / az ajándékokat és égő áldozatokat,
akkor tesznek oltárodra borjakat.

その暁には、あなたは真理のいけにえ・完全に焼き尽くすいけにえを嘉し、
その時にはあなたの祭壇の上に雄牛が運ばれるであろう。

II

イザヤ書第53章

ところで、先に本稿の「序」の部分において、イザヤ書から詩編第 51 (50) 編に向けての史的経緯を仮説として踏まえたい、とする旨を明らかにしておいた。実際この詩編第 51 (50) 編について、「この痛悔の詩編は、預言者文学、とりわけイザヤおよびエゼキエルとの際立った親近性を呈している」という指摘がすでに行われている (A. Filippi et al. 2009: 1266)。本稿は、イザヤ書が先行し詩編第 51 (50) 編がその影響を受けたという仮定のもとに、この「親近性」を解明しようとする試みである。

まず、上掲した詩編第 51 (50) 編の結部 (21 節) に「その暁には、あなたは真理のいけにえ・完全に焼き尽くすいけにえを嘉し、その時にはあなたの祭壇の上に雄牛が運ばれるであろう」という一節がある。「完全に焼き尽くすいけにえ」と訳した部分、原語は 'ôlâ w^akālîl であり、これは単に「焼き尽くすいけにえ」と言った場合と何ら意味は異ならない (ギリシア語訳 ὀλοκαυτώματα)。この「焼き尽くすいけにえ」の次第と詳細については、レヴィ記第 1 章、第 6 章 2-6 に記述がある。その中には「贖うこと」(kappēr; レヴィ 1: 4) の語が

見え、このいけにえが、奉納者の罪を贖う意味と効力を有することが明らかにされる。これは当然、同じくレヴィ記第 17 章で次のように語られる「祭壇に注ぎかけられた血による贖い」の務めを果たすことを意識したものである。

「生けるものの生命は血の中にある。わたしがあなた方に血を与えたのは、祭壇の上で、あなた方の生命のために贖いを行うためだからである。なぜなら血が、その中の生命によって贖いをするからである」(レヴィ 17, 11)。

この一節はその後に続く「いかなる生き物の血も、決して飲んでではない。すべて生き物の生命は、その血だからである」(レヴィ 17: 14) に引き継がれる。すなわち、生き物の生命が宿る血に関しては、神がこれを統べること、そして神は生き物を生かすために贖いをおこない、その贖いは血を通して行われることが、この一連の文脈で宣言される。したがって、もし血が穢れたなら、人の力でその穢れた血を贖うことは不可能であり、人が自ら「血を飲む」といった行為に訴えることは許されない、ということがここで明らかにされているわけである。

このように、人が自らの力に訴えておのが穢れを贖うことは不可能である。だがそれ故にこそ、「第 2 イザヤ」に描かれる「主のしもべ」の姿が輝きを放つ(秋山 2020a)。

イザヤ書第 53 章 8 節～12 節

8) mē'ōšer ūmimmišpāt luqqāh w'e't-dôrô mî y'sôhēah / kî nigzar mē'ereṣ ḥayyîm mippeša' 'ammî nega' lāmô

強いられ、裁かれて、彼は生命を取られた。彼の世代の中で、誰が思い巡らしただろうか。彼が生ける者たちの地から隔離され、わが民の罪ゆえに、彼が死という打撃を受けるということを。

9) wayyittēn 'e't-r'sā'im qibrô w'e't-'āšîr b'mōtāyw / 'al lō'-ḥāmās 'āsâ w'lô' mirmâ b'pîw

そして主は彼の墓を悪しき者たちとともにし、彼の死に際して富める者を伴わせた。彼は悪を行わず、彼の口には偽りがなかった。

10) wa'āḏōnāy ḥāpēs dakk'ô heḥ'elî 'im-tāšîm 'āšām napšô / yir'e(h) zera' ya'arîk yāmîm w'hēpeš 'āḏōnāy b'yaḏô yišlāh

だが主は、彼を病いで打ち砕くことを喜びとされた。もし彼が、償いの献げ

物として自らの生命を置くのであれば、彼は裔が日々永く生きるのを見るであろう、そして主の喜びは、彼の手においていや増すであろう、と。

11) mē^ˈmal napšô yir^ˈe(h) yišbā^ˈ b^ˈda^ˈtô / yašdîq šaddîq ʿabdi lārabbîm wa^ˈāwōnōtām hū^ˈ yisbōl

彼はおのれの生命の苦しみから見、知って満たされるであろう。わが僕は義しき者、多くの人々を義しき者とし、彼は彼らの罪を負った。

12) lākēn ʾaḥalleq-lô ḥārabbîm w^ˈeṭ-ʾašûmîm y^ˈhallēq šālāl / taḥaṭ ʾāšer he^ˈʿrā lammāweṭ napšô w^ˈeṭ-pōš^ˈim nimnâ / w^ˈhū^ˈ ḥēṭ^ˈ-rabbîm nāsā^ˈ w^ˈlappōš^ˈim yaggia^ˈ

それ故わたしは、多くの者を彼の取り分とし、彼は多くの人々を分け前として受け取るであろう。彼がおのれの生命を、死に至るまで注ぎ出したため、そして咎ある者たちとともに数えられたためである。多くの人々の罪を担い、咎ある者たちのために執り成しをしたのはこの人であった。

この末尾の一節に現れる、(主のしもべによる)「執り成し」(yaggia^ˈ; pāga^ˈのヒフイル態)という概念こそ、自ら自身では償いが不可能な人類にとって不可欠な、人類史上における必然なのであり、この「執り成しをする」プロセスにおいて求められる行為とは、主のしもべが自らを「償いの献げ物」(ʾāšām; イザヤ 53:10)とし、自らの生命、すなわちおのが血を「注ぎ出す」(ʿārā; イザヤ 53:12) 行為なのであった。

Ⅲ

イザヤ書第43章

上で、詩編第 51(50)編末尾の部分に注目し、「いけにえとしての奉献」という理念から、イザヤ書第 40-55 章(「第 2 イザヤ」)における「主のしもべによる代贖」に言及した。すなわちレヴィ記には、犠牲獣の血を流すことによる贖いの式次第について仔細にその規定が述べられているのであるが、そのような儀式では贖罪が不十分なのである (cf. ヘブライ書 10:4)。

ただここで注意しておきたいのは、この詩編第 51(50)編においては、たとえば「わたくしを血から解き放ち給え」(16)に始まって、遡るならば「あなたの聖なる霊をわたくしから取り去り給うな」(13)、「あなたの御顔をわが罪から逸らせ給え、そしてわがあらゆる不義を拭い去り給え」(11)、あるいは「ヒソプもてわたくしを浄め給え、わたくしを洗い給え」(9)、そして「わたく

しを、わが不義から洗い、わたくしの罪からわたくしを浄め給え」(4)、「わたくしの不義を拭い去り給え」(3) というふうに、本詩編の冒頭から「罪の拭い」に向けての祈願が繰り返されるのに対し、それらの祈願の成就を条件に、「そうすれば」という接続詞で結ばれた帰結節が逐次付加されているという点である (9, 15, 17)。この点は、本詩編が痛悔の性格を持った詩編であるという面を超え、すでに贖いを済ませ罪を赦された者の地平をも同時に指し示しているという事実をよく表す。この詩編第 51 (50) 編にあっては、詩編作者がすでに罪を赦された者の境位に立っているという理解も可能であろう。この詩編がビザンティン典礼をはじめ、キリスト教諸典礼においても用いられることの背景には、救い主が既に到来したという確信の上に立って、この詩編が読誦される性格を備えているという事実がある。

そのような「血における贖いを経たあかつきに実現しうる行為」の筆頭に挙がるのが、この詩編に歌われる、身体の部位のうち「舌」における「喜び」である。

「わたくしを血から解き放ち給え、神よ、わが救いの神よ。そうすればわが舌は、あなたの正義に喜ぶであろう」(16)。

言うまでもなく、舌とは「血」に充満した身体部位である。しかしながら「生けるものの生命は血の中にある」というレヴィ記 (17 : 11) の記述にも示唆されていたように、舌から血が流出するなら生命の危機をもたらす。血とは、身体の内部に留まっていてこそ生命を維持する液体である。その意味で血は、身体の生命活動が内面から支えられているということを、物理的な側面において最も明らかに示す物質である。その「血」が穢れに染まっているならば、「舌」の活動による言語行為は悉く成り立たない。「解き放ち給え」という祈願は、「この血を贖い給え」という表現とほぼ同義と考えてよいだろう。この詩編第 51 (50) 編の冒頭には、「ダビデがベトシェバと通じたことを叱責するため、預言者ナタンがダビデの許を訪れた際に」という題辞が付されていて、これはサムエル記下第 12 章に記された史実と対応させるべく付されたものと思われる。実際ユダヤ教的伝承にあっては、そのような背景に照らしてこの詩編が解されるのが常である。この慣例に基づき、この第 16 節にみられる「血」に関しても、これをベトシェバの夫ウリヤを亡き者としたダビデの罪 (サムエル下 11 : 14-17) と関連させて読む解釈が多い。もっとも、この題辞を取り外して

この詩編を読むことも可能であり、その際には上述のように、レヴィ記ほかに記された「血の贖いの必然性」を背景に理解することができるだろう。

このような「舌」すなわち「血」の贖いに次いで、その直後に表明されるのが「神に対する讃美」である。この「讃美」についても、イザヤ書との関連において、既刊の拙稿（秋山 2020c : 107-108）で私見を明らかにした。ここでその梗概を述べることにしよう。イザヤ書第 43 章には次のような一節がある。

「見よ、新しいことをわたしは行う。今やそれは芽生えている。あなた方はそれを悟らないのか。わたしは荒れ野に道を敷き、砂漠に大河を流れさせる。野の獣、山犬や駝鳥もわたしを崇める。荒れ野に水を、砂漠に大河を流れさせ、わたしの選んだ民（«*‘ammî b’hîrî*»; LXX: «*τὸ γένος μου τὸ ἐκλεκτόν*»）に水を飲ませるからだ。わたしはこの民をわたしのために創った。彼らはわたしへの讃美（«*‘hillālî y’sappērû*»; LXX: «*τὰς ἀρετὰς μου διηγέισθαι*»）を語るであろう」（イザヤ 43 : 19-21）。

この一節で、神により「わたしの選んだ民」(43 : 20) とされているのは、言うまでもなくいわゆる「捕囚の民」である。この民は神により「(神なる) わたしが、自らのために創った」(43 : 21) と述べられる。そしてこの民は、当然のこととして、「わたし(神)への讃美を語るであろう」(同) と予期・期待されている。

筆者は、この一節はヨハネ福音書 7 : 38-39 に述べられるイエスの言葉«わたしを信じる者は、その人の内奥から、活ける生命の水の河が流れ出すであろう»の典拠になっていると解釈する立場に立つが、福音書中、その直後の一節において、上の「活ける水の河」とは「イエスに信を置く者たちが受け取ることになる聖霊のことである」(ヨハネ 7 : 39) と明らかにされている。つまり、先のイザヤ書からの考察を一貫させるなら、「讃美」とは聖霊の溢れと同一視されるべきものであるが、それは「神の民」の果たすべき当然の務め・必然である。聖霊の溢れという現象は、まずもって「讃美」がその人の口から迸り出るかどうかで判断されることができよう。

「讃美」をめぐり、イザヤ書からの考察を先行させたが、「讃美」のテーマは、本稿で考察の中心に据えている詩編第 51 (50) 編にも現れていた。

「主よ、わが唇を開き給え、そうすればわが口は、あなたへの讃美を告げ知

らせるであろう」(17)。

先に「舌」をめぐる考察を展開したが、舌とともに用いられるのが「唇」そして「口」である。唇が、人間が自ら開くものではなく、神によって開かれるものであるとされている点に注目したい。そして、そのように神の意志ないし神からの恵みによって開かれる「唇」「口」が、まずもって行うはずの行為とは「讃美」である。

IV

イザヤ書第61章

先にイザヤ書第 43 章において、神自身が自らのために創った「民」とは、もっぱら神に対する讃美を務めとする存在であった（イザヤ 43：21）。この「民」は、第 43 章冒頭において

「恐れるな、わたしはあなたを贖う。あなたはわたしのもの、わたしはあなたの名を呼ぶ」（イザヤ 43：1）

と語られているように、捕囚の憂き目に遭って異国にあり、戦々兢兢とする小さな民である。もとよりこの一節には、先に注目した「贖う」という動詞が見える。イスラエルの民とは、本質的に最も小さき存在であった。

「主があなた方を愛し、あなた方を選んだのは、あなた方がすべての民の中で最も数が多かったためではない。むしろあなた方は、すべての民の中でもっとも小さきもの（*mē'at < mā'at*）であった」（申命 7：7）。

捕囚からの解放という経験は、第 2 イザヤ預言者によれば「出エジプトの体験よりも偉大な事績」（イザヤ 43：18-19）であるが、その出エジプトの経験をも含め（出エジプト 3：9）、奇跡とも言いうるものの実感は、小さくされるという体験なくしては経験しがたい。詩編第 51 (50) 編は、この間の経緯をも明らかにしている。

「神に適う献げものは打ち砕かれた霊、打ち砕かれ砕かれた心を神が無とす

ることはない」(19)。

この一節においては「打ち砕く」(šābar, 2回)および、「砕く」dākāという語彙が繰り返して用いられている。他には詩編 51(50):10 にも見られた。これ以外に、旧約聖書において用いられる同義語動詞として「低くされる」(‘ānā)がある。この動詞は、たとえば詩編第 119(118)編では第 67, 71, 75, 107 節に「低くされる」という動詞形において用いられており、また第 50, 92, 153 節には同根の名詞形 ‘onī (「低さ」)が見られる。それらのギリシア語訳は基本的に、それぞれ動詞 ταπεινῶν およびその名詞形 ταπεινώσις である。詩編第 51(50)編第 10 節および 19 節のギリシア語訳では、上記「砕く」dākā の訳語としてこの ταπεινῶν が受動分詞で用いられていた。

本稿は、特にビザンティン典礼における詩編第 51(50)編の読誦の習慣を意識しつつ書き進めているものであるが、このビザンティン典礼の礎を据えたと言えるギリシア教父大バシレイオス (330-379) は、詩編第 34(33)編への詩編注解において、この第 51(50)編を次のように引用している。「低くされる」という体験から出発することを通じて、この世に望みを置かず、来るべき復活の世にのみ希望を置く者こそ「心砕かれた者」である、とするバシレイオスの解釈は大変興味深い。

「<主は、心において打ち砕かれた者に近くある> (詩編 34(33):19). これは肉における主の到来が既に近く、それほど遠く離れてはいないということを告知らせるものである。イザヤの預言に基づき、このことを信ずべき使信とするがよからう。<主の霊がわたしの上にある。その霊のために主はわたしに油を注いだ。主はわたしを、貧しき者たちに福音を告知させるため、心において打ち砕かれた者たちを癒すため、虜われの者たちに解放を、眼の見えない人々に視覚を与えるために遣わした> (イザヤ 61:1). というのも、心において打ち砕かれた者たちの医者(イザヤ)は、遣わされたとき「主は近い」と言う。低くされ(ταπεινοί) 自らの思いを打ち砕いたあなた方に、わたしは言いたい。来たるべき事どもの喜び(χαρά)を提示することで、わたしはあなた方を快活にし、寛厚な心に導きたい。心における「打ち砕かれ」とは、人間的な打算の滅却である。この世の事柄を蔑ろにし、自らを神の言葉に委ねる者、そして自らの導きを、人間的なことを超えた、より神的な想念に託す者、この人こそ、<打ち砕かれた心を持てる者>であろうし、この人こそ自らの心を<主によっ

て無とされぬいけにえ> (詩編 51 (50) : 19) とする者であろう。なぜなら
<打ち砕かれ、低くされた心を神は無とされない> (同) からである」(大バシ
レイオス『詩編注解』(詩編第 34 (33) 編) ; PG29, 380BC)。

V

イザヤ書第60章

ところで、詩編第 51 (50) 編には「わたくしに喜びと歡喜を聞かせたまえ。
そうすれば低くされた骨は歡喜に踊るであろう」(10) という一節があった。こ
こには「低くされた骨」という表現があり、前節で見た「心において打ち砕か
れた者」という表現との共通性をうかがうことができる。またこの一節には「喜
び」そして「歡喜」という語彙が用いられている点が注目される。このような
「喜び」あるいは「歡喜」という表現は、詩編第 51 (50) 編に頻出するものであ
る。

「わたくしに喜びと歡喜を聞かせたまえ。そうすれば低くされた骨は歡喜に
踊るであろう」(10)。

「救いの喜びをわたくしに返し、治めの霊もてわたくしを力づけ給え」(14)。

「わたくしを血から解き放ち給え、神よ、わが救いの神よ。そうすればわが
舌は、あなたの正義に喜ぶであろう」(16)。

次に引くのは、前節と同様、バシレイオスの『詩編注解』(詩編第 46 (45) 注
解) からであるが、この一節においてバシレイオスは、詩編第 46 (45) 編 5 節
<川の流れが神の都を喜ばせる> を注解するに際し、上掲のヨハネ福音書第 7
章 (38) を引用する (以下本節での参照箇所は、秋山 2020e と重複する)。

「<川の流れが神の都を喜ばせる> (詩編 46 (45) : 5).... この世では、義
しき者が活ける水を飲む。後の世においては、神の都の住民として登録された
者が、さらにふんだんに水を飲む。現在では、鏡を通して謎のうちに飲むので
あり、それは神の教えをわずかに把握することによってである。もっともこの
人は、その時が到来するや、一度に溢れかえる川を受けることになる。その川
は、喜び (εὐφροσύνη) でもって、神の都全体を溢れさせることができる。こ
の神の川とは、聖なる霊以外の何という方であろうか。その聖霊とは、キリス

トに信を置く者たちの信仰から、相応しき者たちの内面に生じるものである。なぜなら「わたしを信じる者は、その人の胎から川が流れ出す」(ヨハネ 7:38) からである。またこうも言われている。「もしある人が、わたしの与える水から飲むならば、その人のうちには永遠の生命へと進る水の泉が湧き出る」(ヨハネ 4:13)。この川こそ、神の都を一度に喜ばせる (εὐφραίνει)。この都とは、天上に市民権を得る者たちの教会と考えるべきであろう。もしくは、この世を越えた諸力から人間の靈魂に至るまで、思惟的創造のことを、聖靈の流れによって喜びを得る都と考えるべきであろう」(PG29, 421BC)。

バシレイオスがここで「思惟的創造」のことを「都」、しかも「聖靈により喜びを得る都」と解している点は注目に値する。そしてバシレイオスは、これに続く一節において、「喜び」あるいは「歓喜」という語彙が現れるイザヤ書第 60 章を引用している。

「というのもある人々は、都とは律法にしたがって治められ、その礎を据えられたシステムであると定義している。こうして与えられた都の定義は、天上界の都としての上なるエルサレムにちょうど当てはまる。なぜなら、彼処にも初子たちのシステムがあり、これは天に記された者たちの機構である。そしてこれは、聖なるものたちの行状の揺らぎなさを通じてその礎を据えられ、天上的な律法に則って治められたシステムである。かくしてかの町の秩序、そしてすべての規約を学び取ることは、人間の本性に可能なことではない。というのもこれらこそく目が見たことも、耳が聞いたことも、人の心に昇ったこともなく、ただ神が、神を愛する者たちのために備えたもの」(1 コリント 2:9) だからである。彼処には、幾千の天使たち、聖人たちの集い、天界に書き記された初子たちの集会以外にはない。この集いについてダビデは語っている。「あなたについて栄光ある事どもが語られた。それは神の都」(詩編 87(86):3)、かの都では、イザヤを通じて神が約束する。「わたしはあなたを永遠の歓喜として、代々を超えた喜びとして置く」(イザヤ 60:15)。「あなたの領地には悲しみも、悲惨もない。あなたの城壁は救いの壁と呼ばれるであろう」(イザヤ 60:18)」(PG29, 421D-424A)。

これらの諸節には、バシレイオスによる聖靈論の持つ著しい特徴がある。それは彼が、聖靈を「場」と捉えているという点である。この解釈は『聖靈論』

第 26 章において明らかにされている。

「次の事柄は語るに意外であるが、何ごとにも劣らず真理である。それは、霊はしばしば、聖化される者たちの〈場所〉だと言われているということである。そしてこのあり方は、霊を何ら貶めるものではなく、むしろかえって栄光化するものである。というのも御言葉はしばしば、明晰さを図る目的で、物的な名詞を霊的な想念にも及ぼして用いるからである。われわれは、神に関しても詩編詩人が次のように述べているのを知っている。〈あなたはわたしにとって、盾に優る神となり給え。そしてわたくしを救うべく要塞の場所 (τόπον ὀχυρόν; LXX では「逃れの家」 οἶκον καταφυγῆς) となり給え〉 (詩編 30 : 3)。一方霊に関してはこう言われている。〈神は言った。わたしには場所がある。あなたは岩の上に立つがよい〉 (出エジプト 33 : 21)。これは、モーセが自らそこに至り、自らに現れた神を知的に見ることのできる、霊における観想という場所以外のいかなるものを述べているというのだろうか。これこそ、真なる崇拝に固有の場所である。御言葉はこう述べている。〈あなたの焼き尽くすいけにえ τὰ ὀλοκαυτώματα を、いかなる場所でも捧げるということのないように留意せよ。そうではなくむしろ、あなたの神である主が選んだ場所において行うがよい〉 (申命 12 : 13-14)。では「焼き尽くす霊的ないけにえ」 (ὀλοκαύτωμα πνευματικόν) とはどのようなものであろうか。それは讃美のいけにえ (ἡ θυσία τῆς αἰνέσεως) である。ではこのいけにえを、われわれはどのような場所で献げるのだろうか。聖霊においてである。われわれはこれをどこで学んだのだろうか。〈真なるあり方で跪く者は、霊と真理において父に跪くであろう〉 (ヨハネ 4 : 23) と述べる主自身からである」 (『聖霊論』 xxvi, 62 ; PG32, 181C-184A)。

バシレイオスは、このように聖書の伝承テキストの相違 (詩編 30 : 3) をも根拠に、聖霊を「場」ととらえるという非常に興味深い解釈を行っている。もっとも「聖霊において父に跪く」という表現はヨハネ福音書 (4 : 23) に見られ、何ら不自然ではない。バシレイオスによれば、この解釈は聖書の他の箇所にも典拠を見出す。

「正しき者は、主にあって一つの「場」 (τόπος) となる。主をおのが内に取り込むからである。罪を犯す者は悪魔にこの場を与える。それは次のように語

る聖書に従った理解である。＜悪魔に場（τόπος）を与えてはならない＞（エフェソ 4：27）。またコヘレトが次のように言っている。＜もし権威者の霊があなたに向かって高ぶろうとも、あなたは自らの場（τόπος）を去ってはならない＞（コヘレト 10：4）」（PG29, 324D）。

ところで、バシレイオスが引いていた「讃美のいけにえ」 ἡ θυσία τῆς αἰνέσεως という表現は、そのまま＜讃美のいけにえはわたしの栄光を語る＞という形で詩編 49：23 に出る（49：14 にも；他に 106：22, 115：8）。この句はバシレイオスが『修道士小規定』において、次の詩編第 51(50) 編と連続して引くものである。

質問：「＜あなたが献げものを祭壇に献げるとき、あなたの兄弟があなたに対して反感を抱いていることをその場で思い出したなら、祭壇の前に献げものを置き、その場を去って、まずあなたの兄弟と和解せよ。その後でその場に来て、献げものを献げよ＞（マタイ 5：23－24）という聖句は、司祭たちだけに向けて語られたものなのか、それとも万人に向けられたものなのか。またわれわれはそれぞれ、どのように祭壇で献げものを献げればよいのか」。

回答：「この聖句は、特にまたまずもって、司祭たちに向けられたものだと解するのが文意に適っているであろう。なぜなら＜あなた方は主の司祭たちと呼ばれるであろう。みな神の奉仕者だ＞（イザヤ 61：6）とも、＜讃美のいけにえ（θυσία αἰνέσεως）はわたしの栄光を語る＞（詩編 49：23）、あるいはまた＜神に嘉されるいけにえは打ち砕かれた霊＞（詩編 51(50)：19）＞とも記されているからである。さらに使徒はこう述べている。＜あなた方は自らの身体を、生きた、聖なる、神に喜ばれるいけにえ、血を伴わぬあなた方の奉仕として献げよ＞（ローマ 12：1）。これらは各々、万人に共通のものである。われわれのそれぞれが、このようないけにえを全うする必要がある」（『修道士小規定』 265；PG31, 1261D-1264A）。

そしてその詩編第 51(50) 編においても、17 節と 18 節に「讃美」と「いけにえ」のイメージが連続して現れていた。

「主よ、わが唇を開き給え、そうすればわが口は、あなたの讃美を告げ知らせるであろう」（17）。

「もしあなたがいけにえを欲するのであれば、わたくしは捧げましょう。だが、あなたが焼き尽くすいけにえを喜ぶことはない」 (18)。

そもそも、神に嘉せられるいけにえとはいかなるものであろうか。それは「讚美のいけにえ」に他ならず、この務めを「聖霊において」果たすとき、イザヤ書に見られたような「神の民」が形成される。その「神の民」を個人のレベルでも形成しうるツールの一つが、詩編第 51 (50) 編だと言えよう。絶えざる讚美に時を費やすその民は、「小さき者」として「選ばれた」民であり、讚美とともに常に「歓喜」と「喜び」に満ちた者たちである。

VI

イザヤ書第8-9章

このような「小さくされ」、「歓喜に満ちた民」の歌として良く知られるのが、ビザンティン典礼教会において通常降誕祭（クリスマス）前晩の終課において歌われる「神われらとともにあり」（インマヌエル）である。これは通常、教区聖堂において行われる典礼次第であり、イザヤ書 8：9-13；8：17-18；9：1；9：5-6 をパラフレーズして編まれた讚歌を司祭が唱える一方で、信徒たちがその一句ごとに「神われらとともにあるがゆえに」を繰り返す、という構造を採る。以下、ギリシア語の原文・ハンガリー語の訳詞とともに拙訳を提示する。なおいま述べたように、実際には「神われらとともにあるがゆえに」の句がリフレインされるのであるが、その部分については省略してある。

Μεθ' ἡμῶν ὁ Θεός, γνῶτε ἔθνη καὶ ἡττᾶσθε. Ὅτι μεθ' ἡμῶν ὁ Θεός.

Velünk az Isten, értsétek meg nemzetek, és térjeteك meg, mert velünk az Isten!

神われらとともにあり。諸国の民よ、理解せよ、そして立ち帰れ、神われらとともにあるがゆえに。

Ἐπακούσατε ἕως ἐσχάτου τῆς γῆς, Ἰσχυρότεες ἡττᾶσθε. Ἐὰν γὰρ πάλιν ἰσχύσητε, καὶ πάλιν ἡττηθήσεσθε. Καὶ ἢν ἂν βουλὴν βουλευέσθητε, διασκεδάσει Κύριος. Καὶ λόγον, ὃν ἐὰν λαλήσητε, οὐ μὴ ἐμμεῖνῃ ἐν ὑμῖν. Τὸν δὲ φόβον ὑμῶν οὐ μὴ φοβηθῶμεν, οὐδ' οὐ μὴ ταραχθῶμεν. Κύριον δὲ τὸν Θεὸν ἡμῶν, αὐτὸν ἀγιάσωμεν, καὶ αὐτὸς ἔσται ἡμῖν φόβος. Καὶ ἐὰν ἐπ' αὐτῷ πεποιθῶς ᾖ ἔσται μοι εἰς ἀγιασμόν.

Halljátok minden távol föld, mert velünk az Isten! Hatalmasok térjeteك meg;

Fegyverkezzetek bár, le fogtok győztetni; Övezzétek föl magatokat, le fogtok győztetni; Tartsatok bár tanácsot, meghiúsul az; Osszatok parancsot és nem lesz meg az; A ti félelmetek szerint nem félünk és nem rettegünk; A seregek Urát, őt tartsátok szentnek, ő legyen a ti félelmetek; Ő legyen rettegéseitek és ő nektek szenteléseitekre legyen;

あらゆる遠隔の地よ、聞け、神われらとともにあり。力ある者たちよ、立ち帰れ。汝らは武装する、だが打ち負かされるであろう。汝らは包囲する、だが打ち負かされるであろう。汝らは会合を開く、だがそれは潰える。汝らは命を下す、だがそれは実行されない。汝らの恐怖に倣ってわれらが恐れ怯えることはしない。万軍の主、この方をこそ汝らは聖なる者とせよ。この方をこそ、汝らの恐れとせよ。この方をこそ、汝らの畏怖とし、汝らの聖性とせよ。

Καὶ πεποιθῶς ἔσομαι ἐπ’ αὐτῷ, καὶ σωθήσομαι δι’ αὐτοῦ. Ἴδου ἐγὼ καὶ τὰ παιδία, ἃ μοι ἔδωκεν ὁ Θεός. Ὁ λαὸς ὁ πορευόμενος ἐν σκότει, ἰδε φῶς μέγα. Οἱ κατοικοῦντες ἐν χώρᾳ, καὶ σκιᾷ θανάτου, φῶς λάμπει ἐφ’ ἡμᾶς. Ὅτι Παιδίον ἐγεννήθη ἡμῖν, Υἱός, καὶ ἐδόθη ἡμῖν. Οὗ ἡ ἀρχὴ ἐγενήθη ἐπὶ τοῦ ὤμου αὐτοῦ. Καὶ τῆς εἰρήνης αὐτοῦ οὐκ ἔστιν ὅριον. Καὶ καλεῖται τὸ ὄνομα αὐτοῦ, Μεγάλης Βουλῆς Ἀγγελος. Θαυμαστὸς σύμβουλος. Θεὸς ἰσχυρός, Ἐξουσιαστής, Ἀρχων εἰρήνης. Πατὴρ τοῦ μέλλοντος αἰῶνος.

És én várom az Urat és őreá fogok várni; Íme én gyermekeim, kiket nekem az Úr jelül adott; A nép, mely sötétségben jár vala, nagy világosságot látá; a halálárnyék tartományában lakóknak világosság támada; Mert kisdéd született nekünk és fiú adatott nekünk; kinek vállán vagyon a fejedelemség, és az ő békességének nem lesz vége, És hivatik az ő neve a nagy szövetség angyalának; Csodálatosnak, tanácsadónak; Istennek, erősnek, békesség fedelmének; A jövődőség atyjának; Dicsőség az Atyának és Fiúnak és Szentléleknek; mert velünk az Isten. Most és mindenkor s örökön örökké, ámen, mert velünk az Isten.

われは主を待ち望み、この方を護りとして待つ。見よ、ここにわが子ら、主がわれに徴として与えた者らがある。深き闇の内を彼とともに歩む民は、偉大な光を目にした。死の陰の支配下に住める者らに、光が差し初めた。なぜなら幼な子がわれらに生まれ、われらに子が与えられたからだ。この子の肩には主権があり、彼の平安には終わりが無い。そして彼の名は、大いなる契約の天使、驚くべき方、助け主、神、力ある方、平和の君、来るべき世の父と呼ばれる。

Δόξα Πατρί και Υιώ και Αγίω Πνεύματι. Ὅτι μεθ’ ἡμῶν ὁ Θεός.

Kai nūn kai aei kai eis tous aiōnas ton aiōnōn. Amēn. Ὅτι μεθ' ἡμῶν ὁ Θεός.

Dicsőség az Atyának és Fiúnak és Szentléleknek, mert velünk az Isten. Most és mindenkor s örökön örökké, ámen, mert velünk az Isten.

栄光は父と子と聖霊に。なぜなら神はわれらとともにあるがゆえに。今もいつも世々とこしえに、まことに。なぜなら神われらとともにあるがゆえに。

Μεθ' ἡμῶν ὁ Θεός, γινῶτε ἔθνη καὶ ἡττάσθε, ὅτι μεθ' ἡμῶν ὁ Θεός. «Μεθ ἡμῶν ο Θεός».

Velünk az Isten, értsétek meg nemzetek, és térjetek meg, mert velünk az Isten!

神われらとともにあり。諸国の民よ、理解せよ、そして立ち帰れ、神われらとともにあるがゆえに。

上に掲げた歌詞は、イザヤ書の第 8 章から第 9 章までを適宜抜粋しつつ編集されたものである。したがってここに採録されたイザヤ書の比較的長いテキストには、「歡喜」ないし「喜び」という表現は、直接には見当たらない。しかしながらこの歌詞に採用されていない部分、たとえばこの間に位置づけられるイザヤ 9:2 の原文には「楽しみ」と「歡喜」が繰り返して現れる。

イザヤ 9:2

hîrbîṭā haggîlā hîgdaltā ḥāššîmḥā šāmḥû l'pāneykā k'sîmḥaṭ baqqāšîr ka'āšer yāgîlû b'ḥall'qām šālāl.

「あなたは楽しみ (gîlā) を増し加え、歡喜 (sîmḥā) を大きくした。彼らはあなたの御前に歡喜した (šāmah)。あたかも刈り入れの時を寿ぐように、また、戦利品を分け合って楽しむ (gîl) ときのように」(イザヤ 9:2)。

ここでは、BHSに載るテキストを若干変え、異読一覧から「楽しみ」(gîlā) が現れるテキストを採用してある。この読み方により、「楽しみ」と「歡喜」とがキアズマ状に交互に現れることになる。「喜び」とはもとより、復活のイエスに出会った際、弟子たちが表明した感情としてわれわれにも親しい(ヨハネ 20:20)。こうして、希望を置くべき場所を、この世から来たるべき世へと移した「小さき神の民」は、インマヌエルの到来を待ち望む「讚美」に声を合わせることになる。ただ、そのインマヌエルの到来がすでに成就した事実として認識されるならば、その民を形成する個人の内面に、「歡喜」に満ちた「来たるべき世」が実現する、というのが、キリスト教典礼に基づいた旧約聖書読

誦に伴う地平なのである。

結.

本稿では、詩編第 51 (50) 編とイザヤ書に共通して現れる主題を「血の贖い」「讃美」「小さくされた神の民」「歓喜」の 4 つに絞り、ビザンティン典礼の次第とバシレイオスの著作に基づきながら、旧約 2 編のテキストを往還しつつ考察を行った。もとより、詩編第 51 (50) 編がビザンティン典礼で幾度となく繰り返し読み誦・唱和される慣習は、この短い詩編の中に、イザヤ書をはじめ、旧約聖書を貫く核心的テーマが十全に掬い取られているという事実に基づいて形成されたものである。ビザンティン典礼とは、そこに参与する者たちに、こうして更なる神学的探求を促す教育的「場」でもあると言えるだろう。

【参考文献】

- 秋山 学 2020e 「大バシレイオスによる詩編唱和の内的意義 —詩編第 119 (118) 編を中心に—」中世哲学会第 69 回大会 (2020.11.07) にて口頭発表。
- 秋山 学 2020d 「ビザンティン修道院典礼の本質—夜半課における詩編第 119 (118) 編の意味づけをめぐる—」『文藝言語研究 言語編』78, 51-79, 筑波大学。
- 秋山 学 2020c 「アレクサンドリアのクレメンスにおける「徳」—特に「賢慮」に着目して—」『中世思想研究』62, 101-109。
- 秋山 学 2020b 「東方のキリスト教」(伊藤・山内・中島・納富責任編集『世界哲学史 4: 中世Ⅱ個人の覚醒』180-181 頁所収), 筑摩書房 (ちくま新書 1463)。
- 秋山 学 2020a 「「主の僕」における「贖い」(イザヤ 52, 15) —「心の祈り」に向けて—」『古典古代学』12, 105-128, 筑波大学。
- 秋山 学 2019 「『イザヤ書』における「残りの者の帰還」(「シェアル・ヤシュブ」イザヤ 7, 3) の射程」『文藝言語研究 文藝編』76, 1-19, 筑波大学。
- 秋山 学 2010b 「ハンガリーのギリシア・カトリック教会: 伝承と展望」, 創文社。
- 秋山 学 2010a 「ハンガリーのギリシア・カトリック教会: 典礼を中心に」(荻野弘之編『続・神秘の前に立つ人間: キリスト教東方の霊性を拓くⅡ』125-183 頁所収), 新世社。
- フランシスコ会聖書研究所訳注 2000 『聖書 原文校訂による口語訳 イザヤ書』, サンパウロ。
- フランシスコ会聖書研究所訳注 1968 『聖書 原文校訂による口語訳 詩編』, 中央出版社。
- ミルトス・ヘブライ文化研究所編 1992 『詩編Ⅲ』。
- H. Bardtke (ed.) 1990, *Liber Psalmorum*, Stuttgart.
- D. W. Thomas (ed.) 1990, *Liber Jesaiae*, Stuttgart.

- F. Brown et al. (edd.) 1906, *Hebrew and English Lexicon of the Old Testament (BDB)*, Oxford.
- K. Elliger et al. (edd.) 1990, *Biblia Hebraica Stuttgartensia (BHS)*, Stuttgart.
- Ivancsó István 1999, *Görög katolikus liturgika*, Nyíregyháza.
- Ivancsó István 2000, *Görög katolikus szertartástan*, Nyíregyháza.
- Keresztes Szilárd (engedélyezte) 1993, *Dicsérjétek az Úr nevét!*: Görög katolikus ima- és énekeskönyv, Nyíregyháza.
- B. Pruche (ed.) ²1968, *Basile de Césarée: Sur le Saint-Esprit*, Paris.
- Orosz László (ford.) 1994, Nagy Szent Bazil: *Életrajzok* II., Nyíregyháza.
- A Rahlfs ²1979, *Septuaginta*, Stuttgart.
- A. Filippi et al., *La Bibbia di Gerusalemme*, Bologna 2009.